

四国遍路 空海 時空を超えて

川崎南 RC 卓話 平成 29 年 8 月 22 日 川崎大師平間寺 藤田隆乗

1、巡礼と遍路

「巡礼」巡り礼拝する 複数の寺院を順序だてて参拝すること

聖地・霊場の参拝 「巡拝」「順拝」「順礼」ともいう

「遍路」弘法大師ゆかりの霊場の参拝

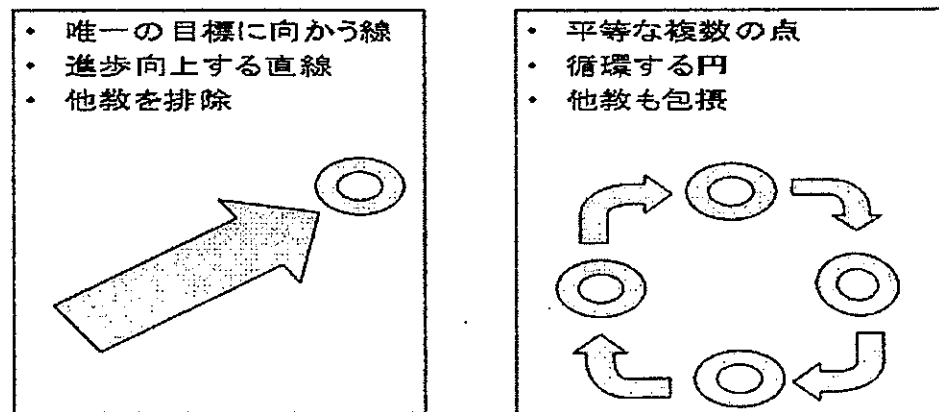
2、「巡礼」の形態 「直線型」(往復型)と「円環型」(回遊型)

「直線型」 絶対的聖地への到達

キリスト教、ユダヤ教の聖地・エルサレムやローマ、イスラーム教のメッカを目指す形態。単一の目的に向かう。

「循環・円環型」絶対的聖地はない

巡礼路と遍路道のコンセプト



- 唯一の目標に向かう線
- 進歩向上する直線
- 他教を排除

- 平等な複数の点
- 循環する円
- 他教も包摂

3、四国八十八カ所霊場の起源

『今昔物語』31-14 12世紀初 仏教説話集

辺地(へち) 辺土 辺路 海岸部の修行=海洋信仰 室戸・足摺

「今は昔 仏の道を行ける僧 三人伴いて四国の辺地と云は伊予、讃岐、阿波、土佐の海辺の廻り也」

『梁塵秘抄』巻2 後白河法皇編纂 今様歌謡集 12世紀後半

「われらが修行せし様は 忍辱袈裟をば肩に掛け

また笈を負い 衣はいつとなく潮垂れて 四国の辺地をぞ常に踏む」

4、四国遍路の特徴 寛容性 多様な巡拝形式

①日時を問わず 巡礼の時期・期間の限定なし

春・秋がシーズンではあるが一年中、いつでも巡礼可能

何日かかっても可 一度に全て巡る 区切る(一国 春秋 週末など)

②人を問わず 参加資格を問わず 開放型 多神教

社会的差異(身分・地位) 生理的差異(年齢・性別)

男女 老若 信徒(真言宗)に限定されない 外国人の歩き遍路増加

③順番を問わず 順番重視せず 逆打ちあり

何番(札所)から始めても可 わざわざ1番から始めなくとも可

出発点は自分で決めて可 自分の居住地に近い札所から可

④手段を問わず 個人 集団

徒歩 自転車 バイク マイカー タクシー 路線バス

マイクロバス 大型バスなど 手段の併用も可

⑤動機を問わず

自分探し 癒やし 死者(先祖)供養 祈願 挑戦 観光 遊行などな

⑥本尊も宗派もさまざま=他宗・他教を問わず

5、接待文化 誰でも受け入れる 区別しない 排除しない

「いかなる遍路、たとえ病人、貧困者であろうと平等に接待する」

お接待 「ふるまい」「もてなし」→布施

●布施 梵語 (ダーナ、dāna)「与える」の意

檀那 (旦那=主人・夫) 檀家 檀徒 施主

3種の布施 ①財施 ②法施 ③無畏施 『大智度論』

●無財の七施

①慈眼施 ②和顔施 ③言辞施 ④身施 ⑤心施 ⑥床施 ⑦房舎施

●喜捨 布施の精神 「見返りを求めない」 「上下関係を作らない」

「取られる」「支払う」「してあげた」ではない

「お接待」はサービスではない

「お遍路さん お接待させていただきます!」

お接待の基本は断らない 「ありがたくいただく」お礼は「納札」宝号三回

弘法大師への布施 遍路を歓待することは背後の大師を歓待すること

6、お接待を支える大師信仰 入定留身 同行二人

①入定留身 空海から弘法大師へ

「入定」 禅定 瞑想 → 永遠の瞑想 不死の生命獲得

●醍醐天皇の夢枕に空海が立つ 延喜21 (921)

「高野山むすぶ庵の袖朽ちて苔の下にぞ有明の月」

大師号の奏請は東寺の観賢僧正 (853~925) が延喜21年10月12日

●「有難や 高野の山の 岩陰に 大師は今も おわします」

天台座主・慈円 (慈鎮) 僧正の作

●『梁塵秘抄』巻2 僧歌13首

「大師の住所はどこどこぞ 伝教 慈覚は比叡の山

横川の御廟とか 智証大師は三井寺にな

弘法大師は高野の御山にまだおはします」

②「同行二人」 菅笠・笈摺

「あなうれし 行くも帰るも 止まるも

吾れは大師と 二人連れなり 南無大師 南無大師遍照尊」



7、空海 時空を超えて 「いつでも どこでも だれにでも」

「いつでも」=時間を超えて

「どこでも」=空間を超えて

「だれにでも」=寛容 包摂 平等

●「排除しない」=調和と寛容 不要・無用なものは存在しない

法隆寺宮大工棟梁 西岡常一の言葉 『木のいのち木のこころ』15頁

「木は人間と同じで一本ずつが全部違うんです。それぞれの木の癖を見抜い

て、それにあった使い方をしなくてはなりません。そうすれば千年の樹齢

の檜であれば、千年以上持つ建造物ができるんです。これは法隆寺が立派

に証明してくれています」